

パーソナリティ及び態度がパートナーとの関係満足度に与える影響

— APIM を用いたペアデータの検討 —

○小溝美湖¹・中島健一郎²

(¹広島大学教育学部, ²広島大学大学院教育学研究科)

問題

夫婦関係における満足度や関係の評価を決定する要因の1つとして、個人特性が挙げられる。金政（2010）は愛着が恋愛関係や夫婦関係といった二者関係の形成や継続に寄与し、関係性に対して影響を与えうることを明らかにした。また、鬼頭・佐藤（2017）は自尊心が高い人ほど自身と配偶者の夫婦関係満足度が高いことを示した。

しかしながら、特性と関係満足度の関連を検討した従来の研究では、その背後にある行動や態度の影響が検討されておらず、どのような過程で特性が関係満足度に影響しているのかといったメカニズムは明らかにされていない。そこで、本研究では個人特性（パーソナリティ）が夫婦の関係満足度に影響する過程について、行動や態度といった対人的な関わりが媒介していると仮定し検討を進める。対人関係を円滑に維持するためには社会的スキルが重要となり、その高さには被受容感や被拒絶感が影響する（徳永・稲畑他, 2013）といった知見があることから、本研究では対人関係の維持に関与すると考えられる被受容感と被拒絶感に着目する。分析には APIM を用い、夫婦の個人内過程のみならず個人間過程も含め相互依存的な影響を検討する。

方法

参加者 2018年3月、インターネット上で調査に参加した20–60代の夫婦500組のうち、437組（夫年齢 M:46.03, SD=13.70, 妻年齢 M=43.69, SD=12.87）を分析対象とした。

質問項目 個人特性として被受容感・被拒絶感尺度（杉山・坂本, 2006）を用い被受容感と被拒絶感を測定した。行動及び態度としては新版感情表出の制御尺度（崔・新井, 1996）、社会的比較志向性尺度（外山, 2002）、共感的感情反応尺度（櫻井・葉山, 2011）、アサーション行動尺度（金子・今井, 2010）を用いそれぞれの行動を測定した。最後に関係満足度を測定した。

結果

特性→行動・態度→関係満足度の影響を APIM で分析し（ $\chi^2=113.131$, $df=29$, $p<.001$, $CFI=.977$, $RMSEA=.081$, $SRMR=.035$ ）、両方のパスが有意であった組合せのみ Sobel Test にて間接効果を検討した。

まず、被受容感の個人内過程について検討した。被受容感は夫婦ともに自身の意見比較・共感的反応・アサーション行動を媒介し、自身の関係満足度に正の影響を与えた（意見比較から順に夫： $b=.20$, $p<.001$; $b=.31$, $p<.001$; $b=.32$, $p<.001$; 妻： $b=.23$, $p<.001$; $b=.21$, $p<.001$; $b=.27$, $p<.001$ ）。被受容感の個人間過程としては、夫婦ともに被受容感が配偶者の意見比較を媒介し、配偶者の関係満足度に正の影響を与えた（夫→妻： $b=.21$, $p<.001$; 妻→夫： $b=.18$, $p<.001$ ）。また、被受容感は配偶者の共感的反応も媒介し、配偶者の関係満足度に正の影響を与えた（夫→妻： $b=.22$, $p<.001$; 妻→夫： $b=.29$, $p<.001$ ）。

次に、被拒絶感について検討する。夫婦ともに被拒絶感は自身のアサーション行動を媒介し、自身の関係満足度に負の影響を与えた（夫： $b=-.33$, $p<.001$; 妻： $b=-.19$, $p<.001$ ）。また、夫の被拒絶感は妻の意見比較・共感的反応を媒介し、妻の関係満足度に負の影響を与えた（順に $b=-.20$, $p<.001$; $b=.20$, $p<.001$ ）。妻の被拒絶感は夫のアサーション行動を媒介し夫の関係満足度に負の影響を与えた（ $b=-.23$, $p<.001$ ）。

考察

本研究では、夫婦関係において個人特性が行動や態度を媒介し関係満足度に与える影響について、APIM を用いて検討した。被受容感が高い人ほど自身と配偶者のポジティブな行動や態度の促進を媒介し夫婦それぞれの関係満足度が高まることが示された。同時に被拒絶感が高い人ほど自身と配偶者のポジティブな行動を抑制させ夫婦それぞれの関係満足度は低下することが示された。